

- ・ 柏木さんは「人が自分の存在に意味を認め生き甲斐を感じる基盤は、自分が成長しているという実感」だ。「発達は人が生きている証しです」と論じている。
- ・ 自分の顔を鏡で観るたびに「老いていく」と思うのだが少し勇気を与えてくれそうだ。

■「おとなが育つ条件 発達心理学から考える」／著 柏木恵子／ 2018年／ 岩波書店

まなび 学びとは・・・

- ・ もう一つ元気のでる本だ。今井むつみさんの「学びとは何か <探求人>になるために」だ。
- ・ この本、面白いのは将棋の羽生善治さんが序文を寄せていることだ。羽生さんは、「究極の学習というのは、自分をきちんと客観的に知る」(メタ認知)と「相手の気持ち、考え方、感情を知る」(思いやり)であると思っている。と寄せている。
- ・ 今井さんは、子どもの「あそび」の積極的意味をとりあげている。
- ・ そして学校は「知識を覚える場」ではなく「知識を使う練習をし、探求をする場」となるべきだ、としている。
- ・ 「知識は断片的な事実の寄せ集めではなく、システムである。子どもは言葉という巨大な知識のシステムを、そのしゅくみを発見しながら自分の力で創り上げていく。知識はつねにダイナミックに変化し、生き物のように成長し、今ある知識が新しい知識を創造していく」「母語を習得するときには誰もがこのような『生きた知識の学び』をしている。
- ・ 未だ母語である「日本語」がおぼつかない60代後半にとって、学びについての勇気をもらえた。

■「学びとは何か <探求人>になるために」／著 今井むつみ／ 2018／岩波書店

「賃金労働者」である自覚

- ・ 年金支給開始年齢はどんどん引き上げられ、年金支給金額はどんどん引き下げられる。
- ・ 「長生きリスク」とか「老後破綻」と言う言葉がある。長生きした結果、取り崩すお金がいよいよ無くなる。
- ・ 働くにも肉体的、精神的にキツイ、稼げない。「賃金労働者」であることを自覚したい。「資産家」は公的年金などあてにしない。「賃金労働者」は「権利」として主張し、年金・医療等の社会保障制度を充実していくしかない。
- ・ 「生産手段を所有」するものとしなないもの、「階級」という概念を思い出した。私は、「労働力」を売ることではしか収入を得ることができない「賃金労働者」「労働者階級」の一員だ。
- ・ 米国でオバマが医療保険制度に取り組んだ時、「社会主義的」だと反発、妨害を受けた。
- ・ そう医療・介護・年金、教育を公的に充実し国民の福利厚生を向上させることは社会主義・共産主義的なものだ。
- ・ 人々が協同し、個人の自由、個人の全面発達をめざす社会、200年前マルスクが提唱した未来社会に通ずるものだ。
- ・ 「1%の勝組」と「99%の負組」富の一極への集中と、貧困。この資本主義社会の矛盾を真正面から分析したのがマルクスだった。

わか 「若マル」が面白い

- ・ 面白い本を見つけた。「若者よマルクスを読もう」だ。若者を対象にした本だが折り返しの若者も読むことにした。
- ・ まずは共著者の1人が内田樹さんであることだ。武道家で思想家の内田さん、2010年新書大賞を「日本辺境論」で受賞している。もう一人は、マルキストの石川康弘さん。この本は、二人の往復書簡の方式をとっている。

- ・ お二人の政治的立場や、マルクスに対する姿勢は異なる。しかしマルクスが現代社会を考える上で大きな鍵になるという点は一致しているようだ。
 - ・ ソ連の崩壊とともに「マルクスは過去のものになった」という風潮があるが、ソ連の崩壊で、「歪められたマルクス」の悪影響が無くなり、本来のマルクスを真正面から取りあげることができるようになった。
 - ・ 現在までに「若者よマルクスを読もう」シリーズは 4 冊発行されている。
 - ・ 「I」は、韓国と中国でも翻訳された。
 - ・ 「反共」が国是であった韓国。独裁政党の解釈が全ての国で、「若マル」が読めるようになった?!
 - ・ 2016 年の「番外編」は、ドイツと英国を訪ね、マルクスの足跡をたどっている。
 - ・ 「20 世紀の歪められたマルクス」ではなく「19 世紀のマルクスを越える」というドイツの研究者との交流が紹介されている。彼は「新メガ」マルクスの著書・書簡・メモを掘り起し、全集としてまとめる作業に取り組んでいる。日本でも翻訳されたマルエン全集（マルクス・エンゲルス全集）は、ソ連流に取捨選択されている「選集」とどまっているという。
 - ・ 英国時代のマルクスが米国の当時の主要新聞（ニューヨーク・デイリー・トリビューン紙）の特派員として 800 本の原稿を送っており、当時の米国世論に大きな影響を与えていた。
 - ・ 昨年発行された「III」では「アメリカとマルクス 生誕 200 年に」と題してマルクスと米国の関係が紹介されている。
 - ・ 南北戦争の際、マルクスが労働者団体の名でリンカーン大統領に書簡を送り、これへの返書があったことが紹介されている。
 - ・ マルクスは、共和制や議会について積極的に評価しており、多数者による支持による革命を模索している。
 - ・ レーニンのロシア革命後の政権を武力によって獲得するという「革命論」とは大きく異なるものだ。
 - ・ ソ連の独裁者、スターリンにより、「マルクスは 19 世紀の過去のもの」「20 世紀はレーニンの時代」とされスターリンの独裁を正当化する「マルクス・レーニン主義」が教典として押しつけられた 20 世紀の歴史も分かりやすく紹介されている。
 - ・ 「日本国憲法」を実質化していく取り組みが強調されている。民主主義を確立していく「人権」「社会権」を確立していく「市民革命」の歴史的意味があるというのだ。
 - 以下「若マル」シリーズ。著者は内田樹さん。石川康広さん かもがわ出版
 - 「若者よマルクスを読もう 20 歳時代の模索と情熱」 2010 年
 - 「若者よマルクスを読もうⅡ 蘇るマルクス」 2014 年
 - 「若者よ、マルクスを読もう 番外編 マルクスの心を聴く旅」 2016 年
 - 「若者よマルクスを読もうⅢ アメリカとマルクス」 2018 年
- 学生時代、「マルクス」「レーニン」からの引用をもって論証を完結していた先輩達にヘキヘキしていた。「定式」を現実にはめることに反発を感じていた。「現実をありのまま」ととらえ、その「現実の中」から「根本をつかむ」ことがマルクに学ぶことではないかと。そして「今ある営み」をより「人間的な営み」にするために取り組むことが大切だと。